

越前の民家にみる「仏間」の空間構成について —住まいの聖なる場所と象徴的意味に関する一考察—

Space construction of “BUTSUMA” in Echizen–Fukui’s traditional farmhouse type
— A Study on the sacred place and the meaning of symbol in the Dwelling —

市川 秀和*
(福井工業大学工学部建築学科)
(地域環境研究教育センター協力メンバー)

1. はじめに —越前の民家の特色と仏間への問い—

福井県の伝統的な民家（農家住宅）に関する本格的な学術的調査研究成果は、1970年に文化庁指導の下でまとめられた『福井県の民家 一民家緊急調査報告書一』（福井県教育委員会、主な調査員／奈良国立文化財研究所：沢村仁、宮沢智士、宮本長二郎、その他：福井大学建築学科の学生参加）が最初であり、それから40年後の現在に至っても、県内の民家研究の基礎資料となっている。この報告書では、戦後の民家様式編年など研究手法の進展が活かされ、福井県の民家をまず嶺北地方の「越前型」と嶺南地方の「若狭型」に大別し、そして嶺北4形式として越前Ⅰ型、同Ⅱ型、同Ⅲ型、同Ⅳ型と、嶺南3形式として若狭Ⅰ型、同Ⅱ型、同Ⅲ型との全2型7形式に分類することで、福井県の民家の基本的捉え方がおおよそ確立された。

このような福井県民家の2型7形式は、その後の調査研究の続行から2型5形式（越前型3形式、若狭型2形式）に整理されたものの、1975年の今庄町板取地区の報告書（福井大学渡部貞清研究室）や1989年『福井県史 資料編14』の「民家」部門（執筆：福井宇洋）、1992年『北陸地方における農家住宅の変容過程に関する研究』（代表：玉置伸悟）、2001年の吉田純一著『ふくいの建築』、さらに2005年の『福井の歴史的建造物』（福井県、監修：吉田純一ら）にも継承された。

右の図1のように、嶺北の越前型と嶺南の若狭型がそれぞれ、滋賀県境を基点に類型分布が明らかである。

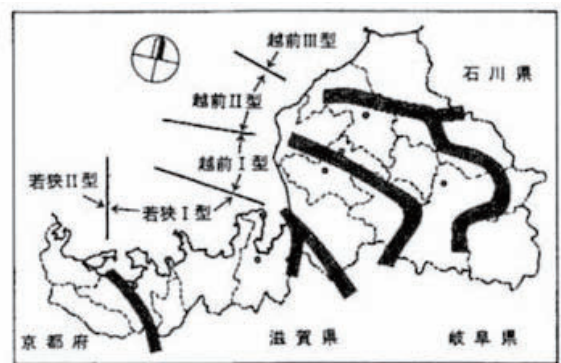


図1) 福井県の民家の類型別（福井県史 資料編14）

■福井の民家 嶺北：越前Ⅰ型、越前Ⅱ型、越前Ⅲ型
嶺南：若狭Ⅰ型、若狭Ⅱ型

（キーワード：越前の民家、仏間、余呉型、真宗道場、建築論）

* Hidekazu Ichikawa

(Department of Architecture, Fukui University of Technology, Fukui, 910-8505)

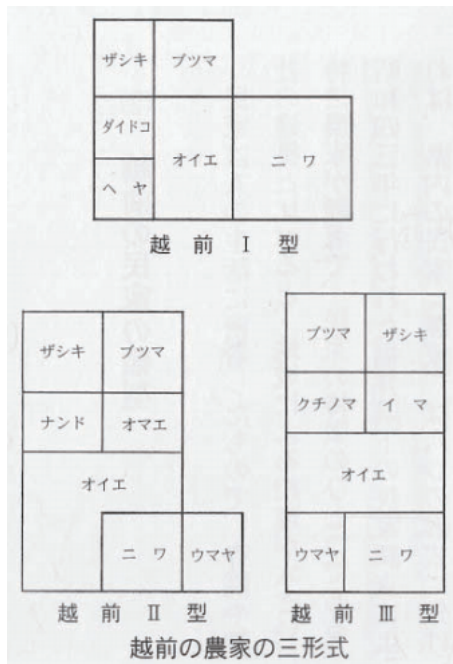


図3 越前型の3形式（吉田純一『ふくい建築』）



図2 旧土屋家住宅（越前III型、旧金津町、現おさごえ民家園）筆者撮影

越前型の典型的な外観・内部の特徴を表す事例

「ツノヤ」と呼ぶ独特な屋根形状が印象的である

このような福井の民家の中で「越前型」に着目すると、その越前I型・越前II型・越前III型の3形式は、それぞれ嶺北南部（今立・武生・鯖江など）・嶺北中央（福井・大野・勝山など）・嶺北北部（丸岡・金津などの坂井郡域）の分布域に位置づけられ、その建築的特色の概要は以下の通りである（図2，3）。

■越前I型：嶺北南部（今立・武生・鯖江など） 入母屋造・茅葺き・平入り

代表例「旧箕輪家（旧今立、おさごえ民家園）」「堀口家（池田町、重文）」「旧谷口家（武生、重文）」

■越前II型：嶺北中央（福井・大野・勝山など） 入母屋造・茅葺き・妻入り（大野では平入りの例も有り）

代表例「旧梅田家（旧福井、おさごえ民家園）」「木下家（勝山、重文）」「旧橋本家（大野、重文）」

■越前III型：嶺北北部（丸岡・金津など坂井郡） 入母屋造・茅葺き・妻入り

代表例「旧土屋家（旧金津、おさごえ民家園）」「坪川家（丸岡、重文）」「旧瓜生家（鯖江、重文）」

さらに越前型における「風土的造形意匠」の共通特色として、（1）ツノヤ（角屋）と呼ぶ独特な屋根形状（2）股柱の使用による構造架構（3）仏間の空間構成（深奥性）の3点が、これまでに指摘されている。殊に正面外観を大きく性格づける「ツノヤ」や内部の構造形式となる「股柱」については、これまでの文化財指定に当たっての実測調査研究等から詳しい考察が見受けられるものの、なお「仏間」の持つ固有な空間的特色については未だ本格的な解明に至っていないのが実情である。

そこで本稿は、福井県の民家の既存研究を十分に踏まえた上で、越前の民家にみる仏間の空間構成の解明に向けた第一報として、素描的な考察を行う。なお戦後の民家研究とは、実証的な科学的観点の下で「様式編年」や「構造技法」などの調査分析手法が進展した結果、文献史料の少ない民家建築の実態が徐々に究明され、全国各地の歴史風土を反映した民家が重要文化財指定による保存へと着実に繋がったものの、住空間の象徴的意味が見落とされてきたことも事実である。福井県における越前の民家においても、ツノヤや股柱の実測調査研究や文化財指定が進む一方で、仏間という住まいの聖なる場所、言い換えれば住空間の象徴性を読み取る「民族建築学」あるいは「建築論」による考察は全く着手されるに至っていない。

そこで以下の本論ではまず、これまでの仏間への視座なり言説を取り纏めて紹介した上で、その空間構成の特色をめぐって、福井市おさごえ民家園の実例（越前Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ型）から考察する。さらに問いの射程を広げるために、近隣の滋賀県・湖北地方と石川県・加賀地方それぞれの民家を参照して考察を付け加える。そしてまた、浄土真宗の道場建築との関わりについても簡単に取り上げておきたいと考えている。このような越前の民家の間取りにおける仏間の空間構成を通して、住まいの聖なる場所、すなわち住空間の象徴的意味をめぐる視座の重要性について、民族建築学的・建築論的アプローチから素描的に考察したい。

2. 越前の民家にみる「仏間」について

2-1) 仏間・仏壇への視座

越前福井の伝統的な民家について「仏堂造り」と指摘し、「どうみても阿弥陀如来を祭る堂としか見えない。・・・まるで仏を拝む以外になんの日常があるのか、という人々の住まいなのだ。」と述べたのは、あの「考現学」提唱で知られた早稲田大学教授で民家研究者の**今和次郎**（1888～1973）であった（図4）。さらに「仏堂と住居のからまり」（『今和次郎集 第2巻 民家論』所収）において、仏堂（真宗道場）と住居の関係を積極的に見出す指摘もしており、これについては後述したい。

かかる今和次郎の見方は、先の『福井県の民家』（1970）の調査メンバーで中心的な役割を担った**宮沢智士**においても全く同様であり、「越前型について・・・真宗の勢力が強い北陸地方では、住いにもこの影響があらわれている。・・・最初に部屋として出現するのが仏間であることは注目すべき点である。・・・仏間が最初に成立する例は他の地域ではみられない。」と論及した（「福井県の民家」建築と社会 1969年10月号）。

さらにこの後、福井県内の歴史的建造物調査の中心となった福井大学教授・**渡部貞清**は、戦前の仙台での学生時代に小倉強（『東北の民家』の著者）に学んだ経験を活かして、1975年に旧北國街道の宿場町として知られた今庄町板取地区の民家調査などから、越前の民家や町並み風景を「雪と念仏の空間」と特色づけて繰り返し強調した（「講演録：雪と念仏の空間」1978、「建築論としての風景」福井県史・資料編 第14巻 1989）。なお渡部貞清の業績については、本誌第7号（2000）の拙稿「建築と風景の詩情」を参照されたい。

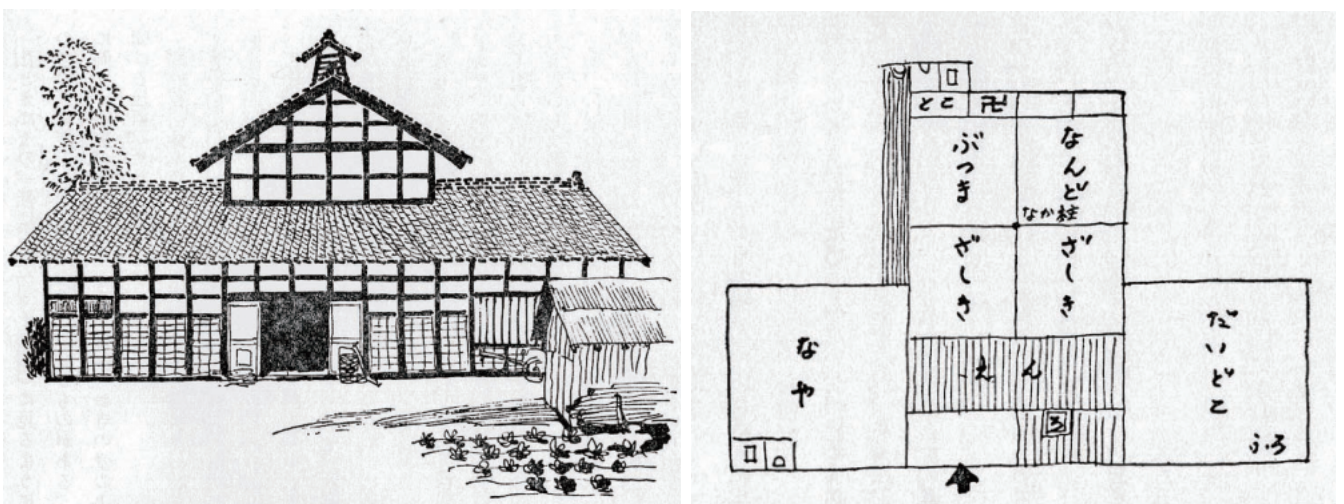


図4) 福井の仏堂造りの民家の正面（左）と 間取り（右）：今和次郎スケッチ

（『今和次郎集 第3巻 民家採集』ドメス出版 1971年 所収：初出『ニューハウス』1965年1月）

また建築計画学の立場で80年代以降、越前の民家の近代的変容から福井の現代住宅成立を現地調査から実証的解明を試みていた福井大学教授・**玉置伸悟**も、その論考「念仏の住まい」（建築雑誌 1993年1月号）に確認できるように、越前の民家における仏間への関心を強く抱いていたようである。

そして『福井県史 資料編 第14巻』（1989）にて「民家」部門を担当した**福井宇洋**は、その民家建築への専らの関心が屋根形状のツノヤや構造上の股柱など技術的視点にありながらも、「大戸口の正面奥に仏壇を祀るのは越前Ⅱ型、Ⅲ型共通の特徴で、妻入り間取りと相まって奥深い荘厳な宗教的空間を演出するのに効果大きい」と言及しており、仏壇・仏間への視座を忘れてはいない。

最後に、今日の福井県における歴史的建造物の調査研究と保存活動を通したまちづくりに実践しつつ、そのリーダーシップを発揮している福井工業大学教授・**吉田純一**にも、その著書『ふくい建築』（2001）では、真宗王国と呼ばれるように越前地方では、その影響が当地の民家の仏壇・仏間にもうかがえると指摘する。

「越前の民家は上手奥にザキシと並んでブツマをとっている例が多い。・・・仏壇はその後ろ側に襖で仕切られた幅二間、奥行き半間のスペースに置かれていることが多い。このようにブツマの上手奥に仏壇があれば、前の襖を開け、手前の部屋の建具を開け放つと、ブツマ、仏壇は土間や入口から後方に奥まってみえることになる。仏事の際には金箔塗の仏壇は蠟燭の火に照らされて光り輝き、土間や入口付近からみれば奥の仏壇は荘厳そのもので、深奥性を感じるはずである。信仰心もより高まってくると思われる。整ったブツマや仏壇の存在、それらへ向かう空間の深奥性といったものも越前の民家の大きな特色といえる」（p88）。

以上のように、戦後に越前地方を民家調査に訪れた**今和次郎**によって初めて見出された「仏堂造りの民家」への視座は、文化庁指導の調査の中核を担った**宮沢智士**を介して、地元の**渡部貞清**や**玉置伸悟**、**福井宇洋**、**吉田純一**へと引き継がれて、仏壇・仏間への視座、すなわち「念仏の空間・住まい」や「空間の深奥性」へと論及されてきたのである。しかしながら斯様に多くの研究者間で論及されつつも、越前民家の仏壇・仏間を独自のテーマとして扱った先行研究は全く見られないのが極めて残念であり、住まいの聖なる場所あるいは象徴的意味の解釈は進んでいないのが現時点であると言わざるを得ない。

では次に、福井市おさごえ民家園における越前型の民家を具体的事例として取り上げ、仏間・仏壇の空間構成へアプローチしてみたい。

2-2）間取りにみる「仏間」の空間構成 —福井市おさごえ民家園の実例から—

福井市おさごえ民家園は、1986年6月から一時的な公開を経て、1989年4月に正式にオープンし、現在で開園21周年を迎えた。当民家園の名称「おさごえ」とは、兎越山あるいは八幡山との間を通る峠道の古称

「尾左越」などに因んで命名されたという。

現在、福井県内各地から当民家園に移築保存されている6棟は、すべて福井市指定文化財となっている。

その6棟とは、旧城地家住宅（旧大野市）・旧岡本家住宅（旧若狭町）・旧土屋家住宅（旧金津町）・旧箕輪家住宅（旧今立町）・旧梅田家住宅（旧福井市）・旧山下家校倉（旧勝山市）である。このうち岡本家（若狭型）と山下家を除いた4棟が越前の民家（越前型）である。



図5）福井市おさごえ民家園の全景 筆者撮影

越前の民家にみる「仏間」の空間構成について

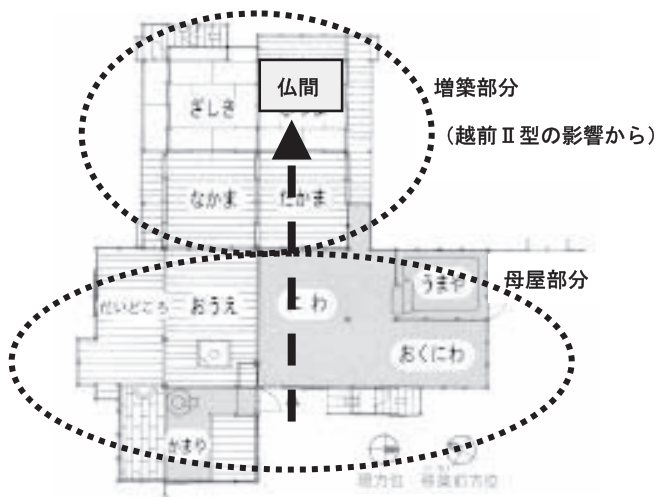


図6) 越前Ⅰ型：旧箕輪家住宅

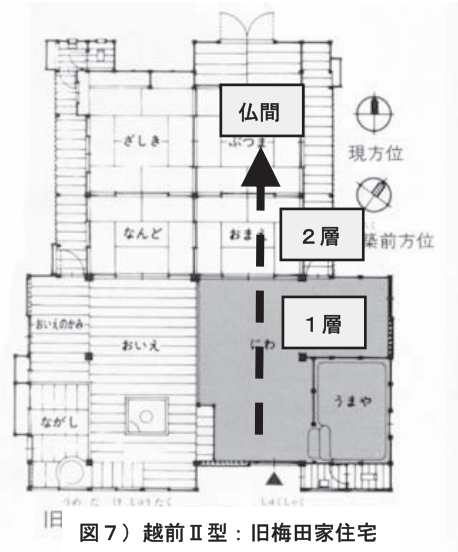


図7) 越前Ⅱ型：旧梅田家住宅

仏間への空間構成：2階層

* 図6、7、9 の平面図は、民家園パンフレットより転載したもの

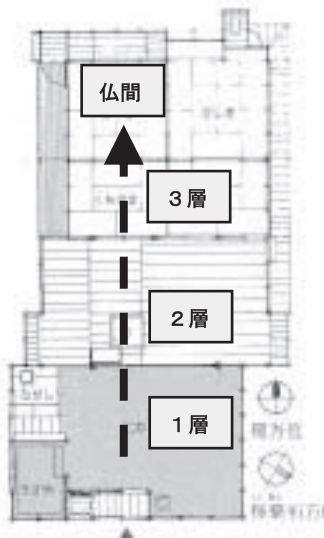
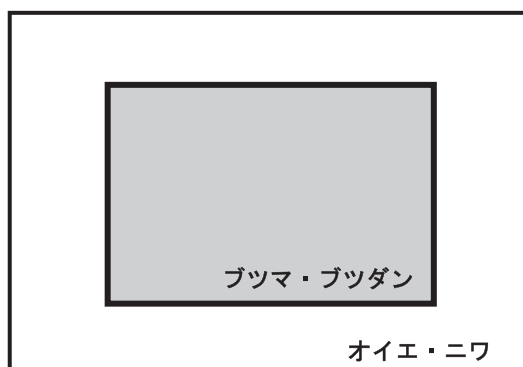


図9) 越前Ⅲ型：旧土屋家住宅

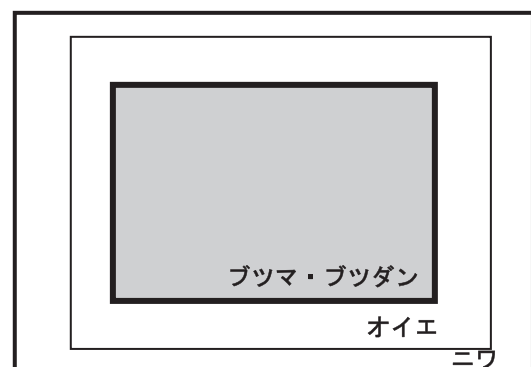
仏間への空間構成：3階層



図8) 旧梅田家住宅：仏間への深奥性が高い空間構成 筆者撮影



越前Ⅱ型：仏間への深奥性（2階層の空間構成）



越前Ⅲ型：仏間への深奥性（3階層の空間構成）

空間構成の深奥性が高まっている

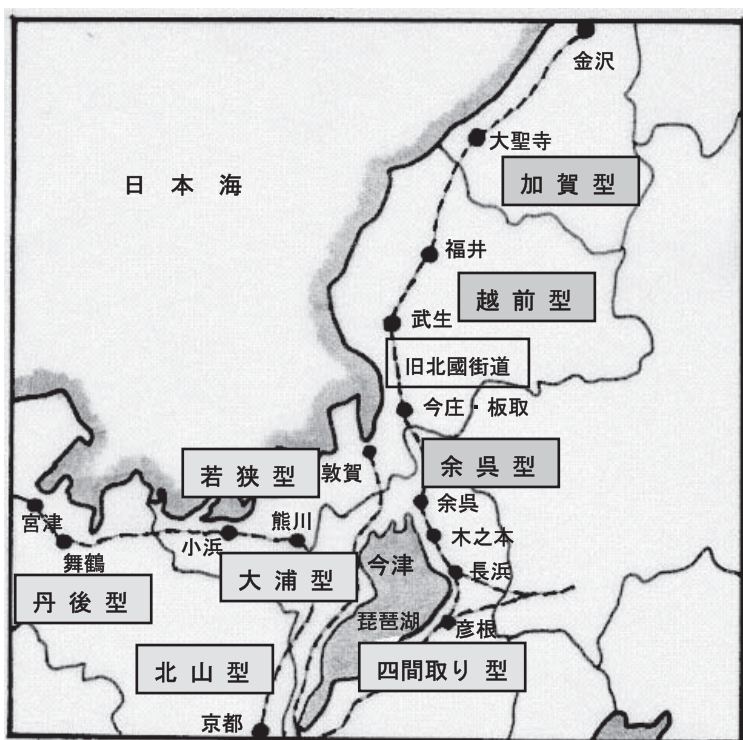
図10) 越前の民家にみる仏間への深奥性：概念図

それでは当民家園から、越前Ⅰ型の旧箕輪家住宅（図6）と越前Ⅱ型の旧梅田家住宅（図7，8）、そして越前Ⅲ型の旧土屋家住宅を（図9）に着目し、仏間への深奥性が強い空間構成について考える（前頁参照）。

越前Ⅰ型は平入りであるため、入口からみると母屋の間取りは水平的な横長の配列となるのが一般的である。ところがこの箕輪家住宅の場合、入口からみて奥手方向に仏間や座敷を後に増築したために、越前Ⅱ型・Ⅲ型と類似の平面構成となった。これは箕輪家の母屋が越前Ⅱ型の強い影響を受けたと言われ、さらに空間構成の視点から解釈すれば、もともと仏間への深奥性が弱い性格の越前Ⅰ型に、増築によって深奥性の強い空間構成を取り入れようとした住み手の空間要求あるいは志向性を読み取らねばならないであろう。すなわち仏間への深奥性は、越前Ⅱ型・Ⅲ型の妻入りによる架構形式から自然に発生したと考えるよりも、住み手の強い空間要求の作用から深奥性の空間構成が創り出されてきたのではないかと想像させるのである。

さらに越前Ⅱ型とⅢ型を見ると、それぞれの間取りは極めて類似性が高いと見られるものの、その相違点とは板間のオイエと土間のニワを一つの架構の中に一体化とする場合（Ⅱ型）と、オイエとニワを別架構として扱うことで2層化する場合（Ⅲ型）で、大きく性格を異にする。この相違点が仏間への深奥性を創り出す上で大きな空間構成上の特色ともなっている。すなわちオイエとニワを一体とする越前Ⅱ型の場合、仏間への深奥性は2階層の空間構成となりやすく、またオイエとニワを別々に2層化する越前Ⅲ型の場合、仏間への深奥性は3階層の空間構成となる。従って、この空間構成のあり方から見れば、仏間への深奥性は越前Ⅱ型よりもⅢ型の方がいっそう強い性格を持つ。これらの概念図が、図10である。従って仏間への深奥性が最も強く、念仏のための荘厳な宗教的空間としての適例を、3つの越前型の中でも越前Ⅲ型に見ることができるわけであり、この旧土屋家住宅のほか、丸岡の坪川家住宅も斯様に解釈することが可能ではあるまいか。

3. 越前の民家とその周辺地域 —旧北國街道沿いの余呉型と加賀型との関わりから—



以上の考察から、越前型の空間構成が
 仏間への深奥性を特色としており、さら
 にかかる性格は越前Ⅲ型に最も顕著であ
 ることが明らかになってきた。なお、こ
 のような越前型の空間構成とは、従来よ
 り関係が強いとされる旧北國街道沿いの
 滋賀の余呉型や石川の加賀型においては
 如何なる有り様で見出すことが可能か。

そこで右の図 11 は、越前の民家とその周辺地域における「型別分布図」概略を提示したものである。滋賀の長浜以北の湖北地方と越前地方、そして加賀地方は北國街道で結ばれており、浄土真宗の信仰風土が極めて強い地帯である。この北國街道沿いの民家は、妻入り三間取型を原型とする共通した民家形式である。

図 11) 越前の民家と周辺地域における「型別分布図」(林野全孝『近畿の民家』相模書房 1980 を参考に作図)

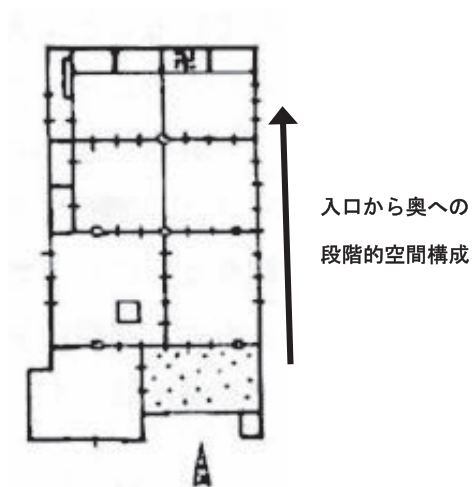


図 13) 余呉型民家の間取り：菅並の民家
室谷誠一の論考から



図 12) 滋賀県余呉の菅並集落の民家 筆者撮影

福井県境に位置する余呉の菅並や鷺見の集落には、
今なお伝統民家や家並みを見ることができる。

越前の民家と滋賀湖北の民家との比較考察に関する先行研究は、まず先の渡部貞清による今庄町板取地区の調査研究から妻入り茅葺き甲造り民家が確認されるとともに、同型の民家が滋賀県余呉の椿坂集落周辺にも見出されることが指摘された（1975 年）。同じく福井県側から玉置伸悟らの計画論的研究、そして滋賀県側の吉見静子の建築史研究が知られるが、いずれも仏間・仏壇との関わりについては触れられていない。

* 玉置伸悟ほか「北陸地方における農家住宅の起源とその発展過程に関する研究」日本建築学会北陸支部研究報告集 第 28 号 1985 年

玉置伸悟ほか「湖北地方・余呉型住宅に関する研究」日本建築学会北陸支部研究報告集 第 28 号 1985 年

玉置伸悟ほか「北國街道沿いの旧宿場集落に分布する住宅について」日本建築学会北陸支部研究報告集 第 30 号 1987 年

* 吉見静子「滋賀県北部と隣接地域の民家 ―形式と変容について―」民族芸術 第 6 号 1990 年

そこで余呉型民家の空間構成を指摘した室谷誠一による論考を参照しながら、越前型民家に見られる仏間への深奥性との簡単な比較を試みる（室谷誠一ほか「余呉型民家の空間構成上の特性」日本建築学会学術講演梗概集 1990 年）。室谷は、入母屋造草葺妻入り三間取広間型を特色とする余呉型民家における内部の空間構成について、「入口から奥へは、床と天井の形状によって、広く未分化な空間から、狭く限定された空間へと段階的に構成されている」と論究した（図 12, 13）。この室谷の「奥への段階的構成」は、越前型の「仏間への深奥性」と基本的に類似する内部空間構成として受け取られ、極めて示唆に富んでいると言えようか。ただ、余呉型民家と越前型民家の基本的な空間構成の類似は指摘可能であっても、同じく浄土真宗の信仰風土篤き土地柄とはいえ、越前型にみる「仏間への深奥性」は極めて特異な事例と考えなければならない。

さらに石川県の加賀型においても、妻入り三間取広間型を基本とすることを踏まえて、室谷と同様な指摘はおそらく可能となろう。なお越前型との比較は、玉置伸悟や島村昇の研究が知られるが、やはり仏間への積極的究明は全く見られない。従って余呉型・加賀型と越前型の比較において、住まいの聖なる場所である仏間への深奥性なり空間構成の性格をめぐっては、近日中に取り組まなくてはならない課題であろう。

* 玉置伸悟ほか「加賀Ⅰ型および越前Ⅲ型民家の構造に関する比較研究」日本建築学会学術講演梗概集 1994 年

* 島村昇『住空間史論Ⅱ 農村住居編』京都大学学術出版会 2001 年

4. 真宗道場の空間構成との関わり ―滋賀県木之本の西徳寺本堂（重文）を通して―

既に引用した今和次郎が越前の民家を「仏堂造りの民家」と指摘するとともに、「仏堂と住居のからまり」では福井を実例にして具体的な真宗道場との類似に触れていた。ここでは、桜井敏雄『浄土真宗寺院の建築史的研究』（法政大学出版 1997 年）に示唆をえながら、真宗道場との関わりを若干考察したいと思う。

浄土真宗の道場建築は、現在でも滋賀・福井・石川などに現役として残存している事例を少なからず見ることができるが、その起源において2つの建築形式がある。すなわち民家の内部に据えられた「内道場」と、その内道場が別棟として独立した「惣道場」であって、越前型の仏間構成を内道場と見なすことも可能であるが、ここでは古式の惣道場として知られる滋賀県木之本の西徳寺本堂（重文）に着目したい（図 14～17）。



図 14) 滋賀県木之本町赤尾の西徳寺本堂（重文）筆者撮影

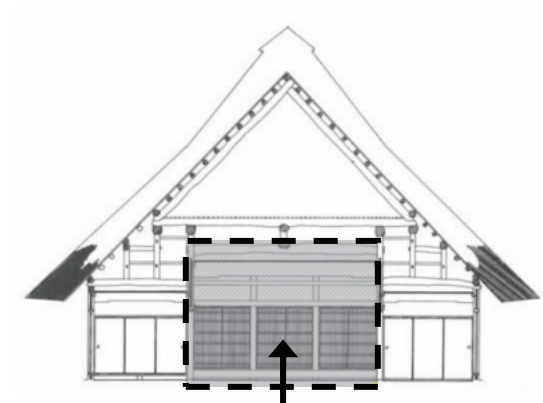


図 17) 西徳寺本堂の断面図

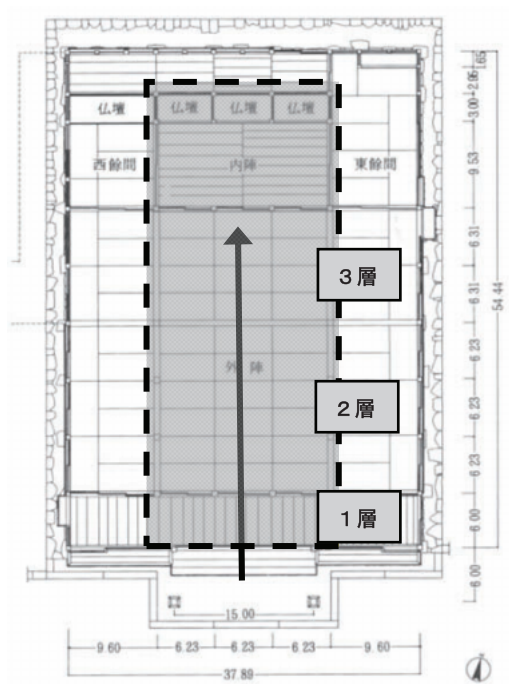


図 15) 西徳寺本堂の平面図

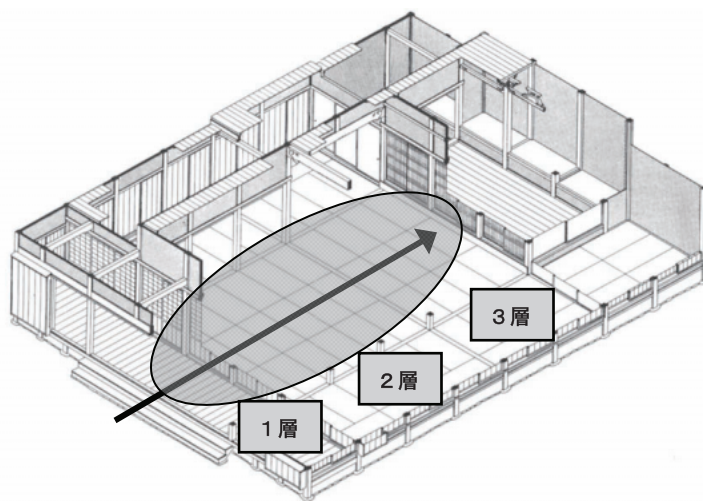


図 16) 西徳寺本堂のアイソメ図

* 図 15, 16, 17 の建築図面は、桜井敏雄の著書より転載

湖北の木之本にある西徳寺本堂は、正徳3年（1713年）建立の入母屋造・妻入り・茅葺きであり、民家風の外観が在郷道場の古式をよく伝えており、正面梁間5間・柱間桁行7間の規模を有している。柱はすべて面取角柱であり、正面にのみ広縁と向拝を置く。昭和61年に重要文化財に指定され、復元工事が実施された。

本論に必要な内部の空間構成に関してみると、後世の装飾荘厳で一体的開放的な真宗本堂とは異なって、中央の内陣と外陣は、両脇の東西餘間境の垂れ壁によって区切られるために、全体的には簡素で閉鎖的でありながらも、中央の奥へ向かう段階的空間構成が強調されており、それは仏間への3層の深奥性と読み取ることが出来るように思われる（図15, 16参照）。不十分な考察のままに軽率な判断なり結論は控えるべきであるが、この旧道場の古式を伝える西徳寺本堂に見られるような、妻入り茅葺きの民家風外観や、内部空間の奥に向かう求心的な段階的構成などに、越前の民家を特徴づける仏間への深奥性やそこで体験される宗教的空間の性格を読み取ることは、それほど間違っているとは思えないのである。

旧北國街道に沿って湖北から越前へと北上し、国境の吉崎（蓮如の御坊）を経て、加賀へと至る真宗風土の根強い当地域においては、念仏信仰と暮らしの営みが深く浸透し合ってきた民衆の歴史が土地に深く刻まれてあるのであり、その象徴化された固有な場所が、例えば真宗道場の古式の建築空間や越前型民家の仏間への空間構成において、現在までも護り伝えられてきたのではなかろうか。

＊なお西徳寺の復元修理工事については、次の文献を参照されたい。

村田信夫・大和智『西徳寺本堂の復元と近在の浄土真宗道場系遺構』建築史学 第18号（1992年3月号）。

5. おわりに ―今後の課題：民家の美学と仏間の象徴性―

民家の造形や意匠に着目する場合、通常はその「屋根」「架構」「窓」「建具」などの建築要素が、様式編年や構法、風土的条件などの実証的知見を基にして取り上げられることが多い。しかし民家そのものの固有な美しさと、その住空間の聖なる場所に見られる象徴的意味をめぐって、**民族建築学的・建築論的**な視点から、最後にまとめて考えたいと思う（参照：森田慶一『建築論』、増田友也『建築的空間の原始的構造』1978年）。

民家の美しさをイメージする場合、工芸における「**美と用の係わり合い**」の視点が有効である。この場合の民家とは、**柳宗悦**（1889～1961）による「**民芸**」と相似的な性格をもっていると言える。

まず民家における「**用**」は、民衆の一特殊なエリートでなく、日常の暮らしに密に結びついた用である。それは高い理想の生活様式というような目標が先に設定された用ではなく、民衆がさりげない生活を送っているうちに、それに適応するよういわば自然に生まれる、成る、成育する用なのである。だからこそ、ここでは**時間の因子**を無視することができない。そして民家の「**美**」は、かかる「用」を無視しては存在し得ないのである。さらに民家の美しさは、**一人の「芸術家—建築家」**によってつくり出された美ではない。それは、**無名の工匠たち**によって**いつのまにかできあがった美**である。民家はこのような微変化の中に連続柱を保って生きつづけてきたのである。従って、民家はこのような伝統の上に成立している。故に民家の美しさには、人の眼を驚かすような新奇さや深い感動を与えるような深刻さはない。それはきわめて**気安い身近な懐かしい美しさ**、そして**祈りにも通じる美しさ**と言わなければならないであろう。

本稿で取り上げた越前の民家にみる「仏間」の空間構成と象徴性を考える場合、以上のような民家の美しさの基礎認識を欠いては意味がない。民家やその住空間とは、単なる物質や技術の集積ではなく、その場所に生きる人間の生の営みと祈り、自然と風土が、非連続の連続に於いて絶え間なく息づいているものなのである。かかる民家への眼差しを基に、越前の民家にみる仏間、念仏の住まいをさらに問い深めたいと考える。